

中川根ふる里通信

= 第49号 =

編集・発行・モアヲブ中川根
 連絡先 〒428 0313
 静岡県榛原郡中川根町上長尾 859-6
 中川根ふる里通信係
 TEL 0547-56-0045
 郵便振替口座 00870-4-81556

夏まつり

★闇を焦がせ

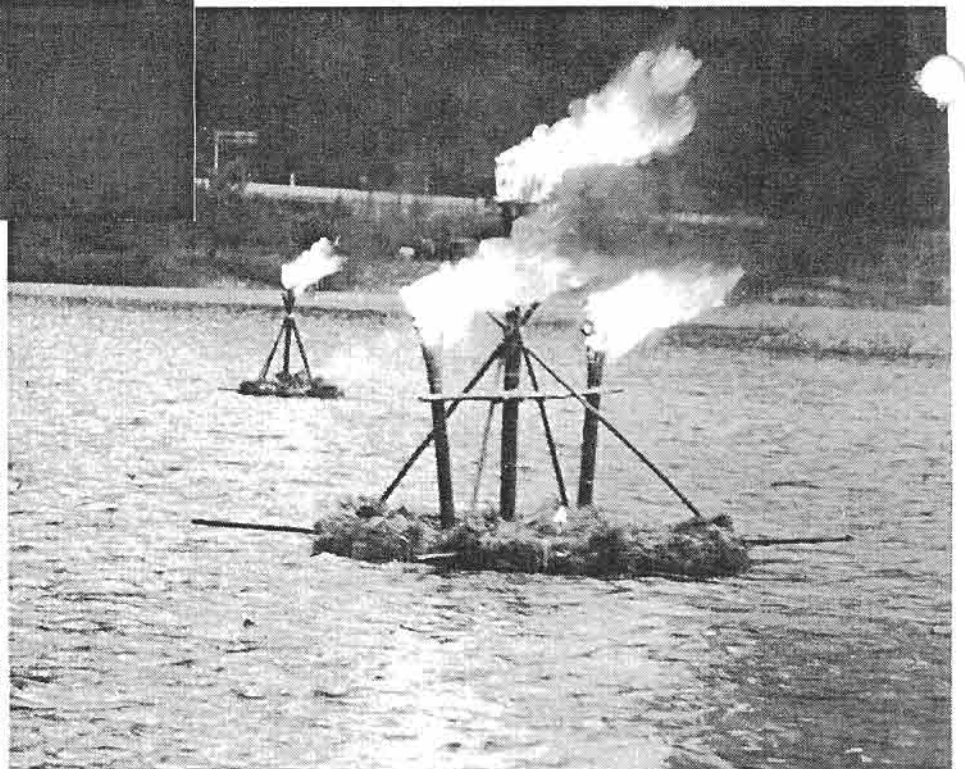
8月8日、高郷前大井川にて
中川根町商工会主催

平谷の流し焚^{たい}火

★神に祈りを

7月14日 平谷前大井川を下る

夕顔の花が咲きました





輝いた人々

藤原崇子さん 地名

全国高校将棋選手権大会
女子団体戦で見事優勝



第48号にて 新人大会準優勝のお知らせをしました。が、今度は全国選手権大会で見事優勝されました。おめでとうございます。藤枝明誠高校三年の藤原さんが、八月八日、九日に、鳥取県倉吉市で行われた第34回全国高校将棋選手権大会の女子団体戦に、キャ



ップテンとして出場。ライバルであり、女子団体戦を連覇中の伊那北高校(長野県)のエース吉田亜希さんを準々決勝で破り、その後、準決勝、決勝と勝ち抜き、藤枝明誠高校を九年ぶり三度目の優勝に導きました。

川根高等学校より

田村加貝昭さん 川根町

全国高校総体弓道大会出場

川根高校三年の田村さんは、八月一日から愛媛県松山市で開催された第43回全国高校総体弓道大会に出場

されました。田村さんは、五月三十日、浜松市で開催された県大会に出場。8射7中し、決勝戦では4射4中、合計12射11中で、同中三名による順位決定戦により二位に輝き、高校総体出場の切符を手に入れました。

梶山 富香さん 本川根町
国体・東海ブロック大会カヤックフォア出場

川根高校三年の梶山さんは、第53回国体、第19回東海ブロック大会の女子カヤックフォアに出場することになりました。梶山さんは、今年四月に川根高校に創設されたカヌー部の唯一の女子部員で、春野高校の女子カヌー部に加わって四人乗りのカヌー競技に出場します。

現在川根高校カヌー部には五人の部員がおり、梶山さんは、学校のプール等を利用して部活動に励んでおり、土日は春野高校に出かけていき、合同の練習を行っているそうです。やがて来る静岡国体ではカヌー会場は本川根町とあります。



原田はつ子さん 旧姓 鈴木 尾呂久保 出身

不登校新聞・静岡通信局

登校拒否や高校中退など、学校と学校に行けない子供たちの心の問題を考える「不登校新聞」がこのほど創刊された。発行は東京・新宿に編集局を置く市民団体「全国不登校新聞社」。市民の情報・意見・経験の交流の媒体となる読者参加の紙面づくりを目指すという。全国十五ヶ所まで有志による通信局も立ち上がった。「静岡通信局」は静岡市常盤町一丁目、タバコ店経営原田はつ子さん方に置かれた。自ら、不登校の息子と歩んで来た経験を持つ原田さんに新聞発行の意義などを聞いた。

——新聞は何を訴えようとしているのですか。

「不登校の子供たちが何を願っているのか、どのように自分の生き方を見つめているのかをまず、皆に知ってもらいたい。学校に行けない子供の存在自体を否定するような考え方で良いのじゃないか。先生も親も、カウンセラーなど専門機関の人たちも、ぼらはらではいけない。新聞が不登校を取り巻くすべての人たちを結びつけるような役割ができればと願っている」



——通信局を引き受けるきっかけは、

「息子の不登校への対応に行き詰まっていたころ、登校拒否を考える会・静岡の仲間に加えさせてもらった。今年四月に考える会が所属す

る。不登校を考える南関東ネットワークの世話人交流会の席で発起人の方から通信局の話をもらった。私一人で取材へ出掛けることは難しいけれど、同じ悩みを持つ親や子供達の相談の場や情報を寄せてもらう拠点の役割ならはと思って引き受けた」

——息子さんの不登校の経過を話してくださいませんか。

「三男が小学校六年生の時、『ノートが埋まらない、あした学校へ行けない』と言いだしたのが始まりだった。息子は自分自身で、なぜ学校へ行かなければならないのかと悩み抜いたようだ。今になって思えば、私も先生も『大人になってから困る。社会に適応できない』と説明していた。かみ合っていた。『人間なんて信用できない』と思わせてしまった。中学に入ってから休ませることが、事態をさらに悪くすると思いつつ、朝、家を追い出して玄関にカギをかけた。自転車で乗せて学校に置りてきたり、先生と協力して車に押し込んで連れていったこともある。やらなければならぬと思いついていた」

——振り返って何が必要だったと感じていますか。

「息子は今、大学入学資格検定に合格し、東京で働きながらお金を貯め、教育学を学びたいと頑張っている。学校へ行けない子供も一つの人格と認めること。学校だけが勉強じゃないと、私がそう思っていて、本当に心から『学校へ行かなくていいよ』と息子に言ったことで気持ちを通じた。不登校は対応を誤ると人権の侵害や精神的な病いなど二次的な悪影響を引き起こすことが本当に怖い」

静岡新聞 教育覧より

ふる里通信48号が発刊して間もなく、新聞に原田さんの記事が載りました。夏、輝いた人々とは言いたくない重みを感じますが、ふる里出身で頑張っている原田さんをご紹介したく、載せていただいたことに感謝します。

「不登校新聞」は6ページ
月2回発行、郵送 西2連
希望者は6ヶ月の購読料
4,800円を 郵便振替で、
口座番号 00100-6-22077
問い合わせは
編集局 TEL 03-5360-1231
静岡通信局 054-253-4416
(原田さん方)

第九回地域づくり団体全国研修交流会 山形大会
海抜0mから2236mの頂きへ昇る鳥海山のようにな

夢はキコつとかなうに参考加して

八月二十七日、二十八日山形県も日本海に面した庄内地方
遊佐町をメイン会場に、地域づくり研修会が開催され、モア
ラブ川根より二名参加致しました。

山形県遊佐町は鳥海山の麓、酒田市の隣町と聞いて
是非参加したいと希望しました。もう八年位前でしう
か、青森から新潟まで奥羽線の旅をした時、車窓からの
鳥海山の美しさが忘れられず、一度登って見たかったこと
又、酒田市にお住まいの上野見さん(徳山出身)にお目
にかりたかったこと、でした。そして、出逢いの夢はかな



ました。交流会のこと
上野さんのこと、そして
鳥海山のこと、ご紹介し
たいと思います。

当地は、みちのく、静岡
より遙か遠方に感じます
が、庄内空港ができてから
羽田から一時間足らずで
行けますか、やはり前日
の出発となりました。お
りしも台風四号による
前線が北関東にかかり
途中、積乱雲の中の飛
行となりました。白く輝
く雲の下では、むしろ

たら、那須や福島、の集中豪雨ではなかったか、と思われ
ますか。……無事庄内空港に着きますと、そこには、上
野さんが、出迎えていて下さいました。

上野 晃さんご紹介

上野さんは徳山出身で、昭和二十年代に酒田に移り住ま
れました。終戦後、東海パルプ(鳥田市)にお勤めになり、
東海パルプが酒田に化学工場を建てて、その勤務に赴任
されたそうです。専門分野は化学など、科学系。やがて、
その工場は廃止され、引き上げますか、上野さんは酒田に
残りませんでした。

庄内は米どころ、鳥海山は火山ですから山に積った雪や
雨はほとんどが地下に染み込み、伏流水となって何年か後に
麓に地下水となり、あるいは湧水となって、おいしい水を供給
してくれます。おいしい米と、おいしい水で、昔から酒造りが
盛んな地でした。上野さんも「初孫」銘柄の東北銘醸(株)へ
就職され、ご専門を生かされ、心血を注いで働かれ、大番
当として、酒屋を盛り立てて、東北一の酒屋になりました。
数年前、酒田市郊外に酒造工場を新設され(初孫ブルワ
ー)良品質のお酒を一度に生産出来るようになりました。

又日本酒の製造過程を見学出来る様になって

おります。初孫ブルワリーの広大な敷地の一角
に酒造資料館「蔵探訪」があります。展
示室、原料米や醸造工程の解説等、フィルム映写、そ
して、きき酒コーナー、飲み比べ……など、日本酒
の良さを満喫できます。そして、上野さんは蔵
資料館の館長さんです。

大正生まれとおっしゃる上野さん、昔年さ

蔵探訪

ながらの元気なお姿は、お酒と探求心と、庄内の豊かな環境と、実家からのお茶にあるのでしょいか。温国静岡から、雪の庄内に移り住み、この地にすっかり根付いて、庄内人となり、生きいきと住らしていらっしやる上野さんに逢えて、とてもうれしかったです。

交流会の様子

遊佐町の鳥海自然文化館「遊楽里」が第一日目の会場となりました。全国四千人参加の会場は熱気でムンムン、実行委員の皆さんの白いTシャツにぶどうの葉の緑が、とてもいい感じでさわやかでした。小野寺町長は、かつて全国青年団長を務めた熱血鬼。若いリーダーの遊佐町は、活気があるな、との印象でした。

開催目的である「二十一世紀型の地域づくり」「明日の地方の夢」を発信し、その実現に向けて、多くの人材と資源を活かす。新システム、具体的な方策を探ってみよう。そして、さまざまな目的と手段で、自らの地域と、自らに挑戦し続けている全国の地域、つくり人ならはの」と、びっきりの夢とそれを支え合える「熱い出会い」さうに、それぞれの町で、「夢はきつとかなう」と活動を続けるための「元気をここ山形からのおみやげにしていたきたい」と

結ばれました。

後、十一の分科会に別れ、話し合いや、

トーク、コンサートを楽しみました。

〇〇の夢(女性・市民・

温泉・ふるさと・広域・出会い・情報

大学・システム) + 大集会 夢トーク

夢コンサートでした。



鳥海山に抱かれて

分散研修会場も十一会場に分かれました。私は、始め第三希望の分散会との連絡がありました。が、「どうしても私は鳥海山へ登りたいんです。私の夢をかえって下さい。」とお願ひしました。ところが、夢はきつとかなう、

の明言どうり、(C)分散会に参加させていたいただきました。テーマは、地域づくり人の疲労回復・自養強壮・夢力増強をはかる。でした。鳥海山中腹の大平山荘にて、満天の星も一箱のまるごと交流は、天候不順の為、室内となり。だが、遊佐町の皆さん、あたたかにおもてなすを受けて山談義にも花が咲き、明日の登山を夢見て、早目の眠りとなりました。

第二日、「雨ならば登らない」——五時起床、雨は降っていませんでした。秋田県の鉾立から鳥海山(二七〇〇m 御浜まで)登山です。途中より露と雨の悪条件にて、目的地手前の賽の河原にて引き帰したのですが、あゝがれの鳥海山に登ることが出来ず、とてもよかったです。下山中、霧のあい間より若緑色におおわれた床内平野も望めました。夢をありがとう。



草創期の協同組合運動と先駆者たち

下泉 松下 麟一 編

今日の経済、社会発展の基礎は、封建社会から近代社会への陣痛の苦しみを乗り越えた。明治のう大正にかけての、協同組合運動に負う所が大きいと思います。そこで、当時、協同組合運動に献身した人々のあゆみを辿って見たいと思います。

産組法公布直後に誕生した

中川根村信用組合と徳嶋若太郎翁

中川根町藤川の、大井神社前の竹林を背に、高さ二・五メートル、巾二メートルの立派な顕彰碑が建っています。これは、明治中期、高利貸や悪質茶問屋などの、飽くなき中間搾取から、住民たちの生活を防衛、安定させた産業組合を設立し、同志と共に、相互扶助の良俗を育て、上質茶生産の基礎づくりをな



しつけた。故徳嶋若太郎翁の功績を讃える碑です。

写真は、徳嶋若

太郎翁、旧、中川

根村第四五九

代村長歴任

中川根町藤川

頌徳碑 (原文・全文)

従三位勲二等伯爵有馬頼寧閣下篆額

語ニ曰ク立徳実行之ヲ不朽ト云フト。勲七等徳嶋若太郎翁ハ、慶応元年三月二日、榛原郡中川根村藤川ニ生レ。明治三十年同村助役ニ就任シテ、村政ニ携ハル。由来同村ハ山間の僻邑ニシテ住民概ネ農耕ヲ業トシ、未ダ金融ノ機関ナシ、偶々事業ヲ企テントスル者アルモ、資金調達ノ途ナク、為ニ遠隔ノ銀行又ハ金融業者ニ頼ラザル得サルノ不便アリ。翁慨然トシテ謂ヘラク地方ノ改良、開発ハ金融機関ノ設置ニアリナリ、乃チ有志、中村善重、森下藤四郎氏等ト謀リ、産業組合法ニ依ル有限責任、中川根村信用組合ノ設立ヲ企テ、同志ノ賛助ヲ得、明治三十四年四月、其ノ筋ノ許可ヲ經テ業務ヲ開始シ、熱心業務ノ發展ト趣旨ノ普及ニ罷ム。是ニ於テ該組合ハ庶民金融機関トシテ村民ノ利用厚生ニ資スル所多シ、理事ニ拳ゲラレ組合長ニ推サル時恰モ翁ヲ助役ヨリ昇任シテ村長ニ就任スルト同日ナリ、事甚ダ奇ニ似テ而カモ偶然、ニ非スト謂フヘシ爾来昭和十六年ニ至ル、實ニ四十有余年、其ノ職ニ留ル之蓋シ、翁ノ畢生ノ事業トシテ、立徳実行ノ顕現ト云フヘク以テ不朽ニ伝フヘシ。亞テ榛原郡議會議員、国勢調査員等ノ公職ニ就クヤ熱誠奉公克フ其職責ヲ全ウセルヲ以テ、旌表ノ榮譽ニ浴スルコト屢々ナリ。今ヤ翁ノ志ヲ継キ、同村農業會ノ中心トシテ隆々其ノ機能ヲ發揮シテ、其光芒愈愈昭カナリ。茲ニ組合員胥謀リ、其功績ノ一班ヲ勒シテ後昆ニ伝ヘ翁ノ偉徳ヲ景仰セントシ、文ヲ余ニ囑ス、銘

二曰ク、厥私而奉公、希民利福、崇々大井流、功業與水長

昭和甲申仲秋

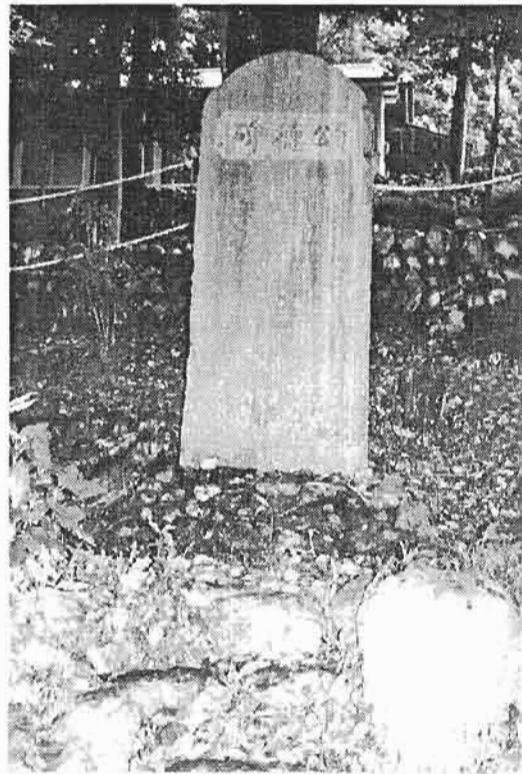
静岡県農業会長從大位勲三等

山口忠五郎 撰

徳嶋翁は、昭和二十年三月十三日、八十二歳で永眠されたが、翁を慕う同志三十一名により、頌徳碑建立の議が起り、二十二年十一月着工、二十三年三月十三日除幕式が行われ、生前、建立計画を聞いた翁は固辞したが、結局、あまり人眼につかない所への条件で、承諾されたそうです。謙遜な翁の人柄をうかがわせる話です。

翁の長男幸一郎氏も中川根第十九代村長、収入役などの公職と、中川根村農協監事を歴任、昭和三十年代の農協再建整備計画には、多大なる実績を挙げました。

孫の英男氏は、中川根村農協組合長、理事も歴任する一方、議会議長としても活躍し、昭和五十年代には、キタハイ農協専務理事として、鈴木七藏組合長と助けあ



けあそ、農協の刷新に努め、大井川農協への大団結の大成し、就げら

れ、また、中川根町森林組合長として活躍されました。その弟淳男氏は二期にわたり中川根町長を勤め（三十一代）町の発展に益されました。これら一族は、つねに頌徳碑を清掃し、山粗の誠をつくされています。

徳嶋英男氏談

夜明けを告げる発動機の音

⑤ 下泉産産業組合と勝山平四郎氏



勝山平四郎氏

村中で最も封建色の強かった下泉集落でも、大正六年、そのカラを破り、東京農業大学卒業の勝山平四郎氏が中心になって、⑤下泉信用購買販売利用組合を設立し、活用協同組合運動を展開し、組合直営の共同製茶工場の、直径二五メートルもある、弾み車の発動機が恰もムラの夜明けを告げるように、すさまじい爆音を響かせ、組合員を呼びました。

勝山氏は、徳山村収入役、助役、村長（十七・十八・十九代）を歴任、中泉農学校の同窓の竹山裕太郎氏が、農林省で、経済更生計画運動を担当していた事もあり、特別指定を受け、下泉農業補習学校を、全日制の高等小学校なみの学校に昇格するなど、青年教育にも献身されました。

氏は戦後、農協設立が模索された頃、徳山村農協従業員組合の諮問に答え、長年の行政、組合運営の体験から、新鮮な下泉協同組合構想を病床で綴られ、二十三年

永眠されました。

《松下記》

改地名産業組合と山下 広氏

山下広氏は、明治三十年一月一日、下川根村葛菴の鈴木家で生まれ、大正三年一月十五日、徳山村地名四三口番地の山下家に婚養子として入籍しました。

資性温厚、沈着で、善悪に潔癖で、深慮断行の人で、読書に親しみ、常に小冊子を懐にし、因甚を樂しみ、その投石は頗る堅実、慎重でした。夙に教育問題に留意し、後進の教育に協力を惜まず、普く善導され、また、理財に長じ、文粗の後を享けて、よくそれを護り資産を増大しました。(東洋経済新報愛読)

大正六年三月、徳山村収入役に、昭和四年と十二年に至る三期、村会議員、その他、人民総代、学務委員、地名水利租合理事、消防組役員など、要職を歴任されました。昭和四年四月、改地名信用購買販売利用組合の専務理事に就任し、昭和十七年に至る十四年間に、その運営を掌り、郷土の産業、経済の発展に貢献されました。

大正十四年、藤枝町に於て、伊久美村、笹間村を対象に物資輸送を目的とする、索道企業の手を知ると、これに合同して、川根索道として、地名以北に延長させ、大井川流域に対し、物資輸送の革命をもたらすめしました。索道は、昭和六年十二月、大井川鉄道全線開通により、廃業しました。

また氏は、金融経済上の円滑な運営を企画し、産業組合と競合しないよう配慮しつつ、駿河銀行出張店の誘致に努め、対岸の下川根村葛菴集落と、産業組合

の合同を企画し、殆んどの住民を地名産組へ加入させ、また、昭和橋の架設、校舎の建設などに、中村為吉村長とともに奔走されました。(地名尋常高等小学校の高等科には、葛菴集落の子供も通学した)

なお、地名には、明治後期に、改製茶改良組合が設立され、製茶の改良、共同化、販路拡張に努めたが、大正十二年一月、改地名信用購買販売利用組合と合併、中村為吉氏が、初代組合長となりました。そして前記の山下専務の奮斗により、組合は充実拡大したのです。

また、杉、松も大事だが、山林には雑木や草などを含めた生態系があり、単なる植林は自然を破壊し、営農にも悪影響があるので、農、山林立体経営が必要な事を説かれました。

なお、下泉に設置された果購連の木炭倉庫における乾椎茸共同販売入札会には、自家生産量の全量を出荷するほか、川根全域の生産者に呼びかけ、輝しい業績をあげました。

椎茸共販の昭和十三年実績は、一、八六七貫(内徳山村八三九貫)販売額一八、六四五円(八九〇四円)平均単価九円九銭(一二円二五銭)の好成績でした。

また、戦争の激化と食糧増産の重要性を識り、高カロリーで、高収穫高の甘藷に眼をつけ、日本一の甘藷作りの丸山方作先生の所へ、小森衛、滝秋道、両氏を派遣し、実地研修をさせたほか、地名、下泉で丸山先生講演会を開き、食糧増産に努められました。





杉山 教論



勝山小学校長



勝山下衆臣長

丸山先生は、大日本報徳社の役員で、その教化を受けた地名の人には、生来のまじめさに、報徳の精神が加わり、心を一つにして、村起し運動を行いなされた。

編集室より

山 木 林 衛 氏 談

松下さんより寄稿いただき、草創期の協同組合運動と先駆者たちとは、四、五〇字にのぼる大作です。四十九号と五十号に分けて載せさせていただきました。次号も今回同様、貴重な文献となっております。お楽しみに、お待ちしております。



みごと、収穫された甘藷。写真右より4人目が丸山先生



中野 謙司さん



大橋 朝太郎さん



松下 克己さん



勝山 碩司さん



竹中 技官



前田 とみさん



松山 きみさん



松下 みかさん

思い出のアルバム

横郷 松下千枝さんより

昭和12年
献穀記念より
新嘗祭供御

東京のかたすみから(二十三)
テレビの始めから終りまで

ある先非車の旦那後

渡邊 寅夫

今年二月二十日の新聞は、日興証券からの利益供与事件で、逮捕許諾請求が出ていた新井将敬衆議院議員の自殺を報じた。先日、大蔵省や霞ヶ関を震撼させた収賄事件の新聞記事をみていたら自殺が目にとまった。

これで証券・銀行をめぐる一連の事件は、第一勧銀の宮崎邦次元会長をはじめ、六人が首つり自殺をしたことになる。

私が報道技術現場に勤務していた時にも悲惨な自殺現場からの中継はいろいろあった。殆んど忘れてしまったが、足年後の今でも、テレビや新聞の自殺報道を見る度に思い出し、何とも気分のめいる事件の一つだけある。

それは、昭和五十四年二月一日のことであった。未確認ではあったが、

日商岩井のダグラス・グラマン疑惑

事件が「政界へ波及」の情報が気になった私は、朝、早目に出社し、勤務先である報道スタジオへ行った。デスクから、「先程赤坂の日商岩井ビルから飛び降り自殺があった。ニュースネタとして欲しいから、緊急出勤するよ。うに」と要請を受けた。

朝早いことでもあり、一人でも多ければ手助けになる

5月3日、スポーツニッポンより
◇最近の汚職絡みの自殺◇

年月日	自殺者(下段は肩書)	場所	メモ
97.6.29	宮崎 邦次(67) 元第一勧銀会長	三鷹市内の自宅	寝室から歴代三頭取にあてた遺書残す
98.1.28	大月 洋一(54) 大蔵省銀行局金融取引管理官	渋谷区内の官舎	東京地検の任意聴取の呼び出しに応じず
1.29	吉田 一雄(64) 道路公団関連会社社長	世田谷区内の自宅	身の潔白を主張する趣旨の遺書を残す
2.19	新井 将敬(50) 衆院議員	世田谷区内のホテル	客室から夫人と弟井静香氏にあてた遺書
3.12	杉山 吉男(46) 大蔵省銀行局中小金融課課長補佐	台東区内の自宅	家族にあてた遺書らしきメモ書きを残す
5.2	朝志田孝之(58) 日銀理事	板橋区内の母家で	幹部行員の汚職に絡み内部調査を担当

※年齢は死亡当時。敬称略

だろうと思つて、応援のつもりと、今回だけは、なんとなく気になったので、中継スタッフの車に部下と一緒に乗り込んだ。約五分後、他のテレビ局に先駆けて現場に着いた。日商岩井本社ビル、並びのTBS側の歩道上に、生しい血が流れていた。遺体はすでに警察の手によって片付けられていた。未だサラリーマンの出勤もまはらで、混雑することもなく、素早くカメラや中継器材のセッティングをした。

この時は、近かつたといふこともあるが、現場着は他のテレビ局を圧して一番乗りであった。各社取材記者の話も聞いてみると、私の浜松の同窓先輩である島田さんらしい。彼は当時、渦中の人物、日商岩井の海部副社長の子分で、常務取締役として航空機輸入を一手に引受けて、世界をまたにかけて活躍していた男である。

島田三敬(当時五六歳)先輩は、太平洋戦争が勃発した翌年の昭和十七年、浜松高等工業を卒業、第一陸軍航空技術

夕刊 読賣新聞 THE YOMIURI SHIMBUN 2月1日 昭和五十四年(1979) 5512544(1979) 15 東京都千代田区千代田 1-1-1

島田日商常務が自殺



子会社ある 密約告白で苦境

7階から飛び降り

「疑惑のグラマン」実務責任者

(昭和五十四年(一九七九)二月一日 読売新聞より)

研究所に勤務し、敗戦時には陸軍技術大尉で復員した。三十二年に日商にスカウトされ、五十三年日商岩井の常務取締役・日商エアロスペース社長も兼ねた。戦中戦後を通して一貫して航空機畑を歩んできた。珍しい存在の技術屋であった。

私の同級生で日商岩井に勤務していた三井武君の話によると、島田常務に紹介してくれと言う浜松出の知人を連れて行くと、彼は次のようによくこぼしていたそうだ。「浜松出の技術屋は真面目過ぎて堅物が多く、ヤボタウで融通が利かなくて面白くない。面倒をみにくい」と。機械工学科出身の技術者である彼は商社の第一線の修羅場で鍛えられたせいかな、押しの効く、清濁合わせ飲める幅広い人間に育ったのだろうと、三井君は思っていたようだ。

吉村公三郎著『謀殺「島田常務怪死事件」』によると、商社員として身なりがきちんとしていることは常識であるが、島田氏はとくにスタイリストであり、ダンディぶりは定評があり、技術屋としてはめずらしいインテリ特有のスマートさがあり、彼がなせあの様な死に方を選ばなくてはならなかったかは、理解出来ないかと述べている。私もドロドロした政財界を背景に、国際舞台で鍛えられた強靱な男かと思っていたら、彼もまた結局、技術屋の単なる堅物の真面目人間から脱しきれなかったのだらうと、思うようになった。

事件の性質上、通夜の模様もニュースネタとして、ナマ中継することになった。現場の目黒区の本町は高級住宅地で、ここで悲しい思いをしたのは、私としては二度目であった。その五年前、SBS静岡放送社長大石光之助氏が亡くなった時にお悔みにお上った所が、偶然にも同じ高級住宅

地の一隅であった。

しかし、今度の方かのはるかにはやりきれない気持ちになった。夕暮れの本枯らした吹く東京の空には、鳥が低く飛んでいた。喪服の参列者はお互いに、何もなかったかのような冷やかな態度で、つきつきと焼香し、無言のままに、足早に去って行った。何も会話のないその後ろ姿は、二十年経った今も、思ひ出すと何故か気になる。

第一線で活躍している仕事関係の方がほとんどのように思えたが、生前、彼とどのように関わっていたかは、全く判らなかつた。『謀殺「島田常務怪死事件」』を読めば読むほど、今だに解らなくなることも多いが、やはり彼のまた悪になりきれず、実直な人間ゆえに自殺という道を選んだのかなと思えてならない。

三月二十日、元日商岩井社長速水優氏が、日本経済の信用秩序の舵取りである日本銀行総裁に就任した。それはこの会社の常務取締役であった島田先輩が、なぜ泥をかぶって飛び降り自殺をしなくてはならなかったのか。渦中の人物が自殺しても事の本質は解決はしない。捜査の混迷は続くのみである。日本的とか言い様がないこの葬列の図式、どっして断ち切れないか。頭の単純な私にはわからない。

平成十年七月記

お断り、ふる里通信第48号「絶対がくすれたコマミヤ

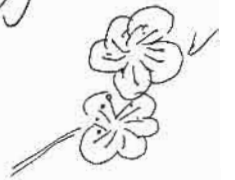


ル」で北陸放送(MRO)を日本テレビ系列としました。TBS系列の誤りでした。深くお詫び申し上げます。ご指摘いただきました。元日本テレビ役員、技術局長栗田富士男さん、ありがとうございます。

ふる里探検 2.

こくうり (穀売・石売)

寺田 力



駿河徳山に狂言「こくうり」が伝えられています。八月十五日の浅間神社の例祭では、今は演じられてはいませんが、明治三五年頃には、ヒーヤイ踊や他の狂言とともに上演・奉納されていたようです。

「こくうり」の筋立・内容は以下のようです。

穀売と魚売が連れ立って京都北野にある菅原道真を祀る天満天神へ参詣する道すから連歌を付け合ふ。天神について手水も使っていると天満天神の末社の福部の神が現れて、連歌の十の徳を語り、舞う。

この筋立・内容は天正狂言本の「連歌の十とく」や大蔵明本の「連歌十徳」と同じです。

連歌と連歌の十徳の語り

「こくうり」で穀売と魚売の詠む連歌は

たいのこけにもさもにたり どこやかしこに五合一升

「連歌十とく」では

ちる花はさながらたいのこけらかな 本にこめよ

「連歌十徳」では

ち(敵)る花はたい(鯛)のうろこ(鱗)に さもに(似)たりうをうり

爰やかしこに五升三升・米うり

となっています。

連歌は中世後期、十五、六世紀頃、地下連歌から俳諧連歌の流れのなかで、民衆の間にも広く流行する娯楽、文

芸となっていて、京都を中心とした地域だけでなく、遠く関東地方にまでも普及していった。そして、南北朝時代の頃になると、天満天神が連歌の神とされ、連歌を天神に奉納すると十の、または二十五の現世的な功德があると宣伝され、信仰されるようになっていった。

道真命日の二月二十五日には、北野天神に参詣、連歌を奉納して冥加と功德に預かろうとする人々が貴賤を問わず拜衆したといわれています。

現に北野天神には「北野天神連歌十徳」と題した連歌師猪苗代兼、藪筆と伝えられる掛軸が所蔵されていて、そこには

一者不行至仙位(一、行せずして仙位に至ることができない)

二者不詣叶神慮(二、詣でないでも神慮にかたうことができる)

三者不移亘四時(三、移らずして季節や時にわたることができる)

四者不節遊花月(四、節約しないでも風流な暮らしかたができる)

五者不行見名所(五、行かすして名所を見ることができない)

六者不老慕古今(六、老いずして古今を慕うことができる)

七者不恋思相別(七、恋をしなくても愛し別れを思うことができる)

八者不捨遁浮世(八、捨てなくても浮世を遁れることができる)

九者不親為知音(九、親しくなくても知人になることができる)

十者不貴交高位(十、身分が貴くなくても位の高い人々と交際できる)

と記されているという事です。

二十五徳には、「不畜翫金玉」「不禦除災難」「不願得安樂」などのように、かなり現世的利益を謳っているものまでが見られます。

「こくうり」も「連歌十とく」も「連歌十徳」も、こくうりた「北野天神連歌十徳」もパロディとして狂言化したもので、連歌が人々の生活と娯楽、文化のなかに生きていた

当時の人々にとっては楽しい芸能であつたのでしう。

「こくうり」の「れんがじつとく」の語りは次のようです。

そもろれんがのじつとくにゆかすしてめふしうするおい
すしてこきんのしでに、みハげんごんにあらわれたりや
そもろれんがのじつちにすく人あらハ、巻かい式かいのもの
あんなれとも、あるひハせうたとじつとふとのゆきさしき
りてとふさもふす、ゆふどんきりてのそのあげくには
うんどん切麦もちまんじう、さて又じよふごハ、ふるう酒
を心のまゝに呑むべしなり、さて又けこにハよい茶を立て
かよふのぐわっけいふだんにするも、それれんがのじつ
とくなり

参考に、虎明本の「連歌十徳」の語りを以下に記しておきます。

そもろ連歌の十とく(徳)には、ゆ(行)かすして名所をしる
しん(信)せずして神慮にかなふ、お(老)いすしてここん(古
今)をし(知)れり、是げんざい(現在)にいま見えたりし
連歌の道をしる人あらハ、いかに下は(輩)の人なり共、
あるひはそう(僧)たちぢしう(地主)たち、地とう(頭)
殿やまところ(政所)殿と、よき座敷にて同座をなせり、
ゆふろ(湯風呂)へ出(入)ての其あげくには、うどんさう
めんもちまんちう、さて又すはいのあげくには、よき
酒を心のまゝにしひ(強)たてまつり、げこ(下戸)には又
よきちや(茶)をたて、かやうのくわっけい(活計)ふ
だん(不断)にあるべし。

「こくうり」の伝承

天正狂言本は、天正六年(一五七八)の日付をもっている
ように、十五、六世紀頃、京都をはじめ各地で流動しな
がら演じられていた狂言の荒筋を書き留めている現在
最古の狂言台本です。また、虎明本は寛永十九年(一六四
三)に、それまで大蔵家に伝えられた狂言を書写した
もので、大蔵流狂言の祖本とされ、「室町時代の狂言の
真の姿を見る」と評されているものです。しかし、「連歌
十徳」はその後廃曲されてしまい、享保六年(一七二二)大
蔵虎純の幕府への「書上」目録や、その後の大蔵流狂言
の定本とされる虎寛本には、その姿は見られなくなっ
ています。

また、他の狂言流派や万明三年(一六六〇)以降刊行
された狂言記には、「連歌十徳」は収録されてはいません。
こういふ事実と経過は、「こくうり」が狂言としては、
近世江戸幕府の式楽に組み入れられたものとは異なった
道筋を辿って駿河徳山に伝えられたことを示していま
す。

「こくうり」は駿河徳山の他の狂言とともに、島田大
津城・徳山城の攻防に見られる十四世紀前後のこの地
の歴史と、それを背景とする多くの伝説とも関わり
ながら伝えられ、この地の人々によって嗜まれ、楽しま
れながら定着し、その後、長期にわたって口伝によっ
て伝承されてきたと思われます。「ヒーヤイ踊歌」を
書写した慶応四、明治元年本の末尾に

「むかしよりやるがくとやら口うつしをほえし
だきを書ておくぞや」(昔より猿樂とやら口移し

覚えし次第を書いておくぞや」と記されているのも、この間の事情を物語っているようです。

そして近世になって、連歌が人々の生活と娯楽・文芸から見放され、「連歌の十徳」についての信仰も忘れられ、さらに、浅間神社の奉納芸能として口伝によって伝承される間に、時々の事情その他によって変化、誤伝を繰り返して、狂言歌謡というよりはむしろ「神呪」として唱えられつづけてきたため、意味不詳の詞章もあえて問うこともなかったと思われまふ。

それにもかかわらず「こくうり」は、連歌が人々の生活のなかに息づいていた時代を感じさせるものとなっています。

「こくうり」の歌謡の最後の一節

「きたのゑさいてうつせにけり」

(北野へ指いて失せ・移せにけり)

は、当時の人々の京都での生活と芸能、天満天神境内での連歌興行の楽しさへの強い思いを感じとることができ、るようです。

二話 終

余録

徳山の盆踊の歴史の重みを感じさせられました。身振り口伝で、何百人、何千人いや何万人の人を経て、今に伝えられたのでし。か。

ふるさと夜話

墓石を傷つける石松信者

原田耕作

八月は盆月、九月は彼岸月、そこで今回はお墓に關係ふかい話にしてみました。

森の石松と言えは、遠州森町の大洞院に墓があつて、墓石がけすり取られることと有名だが、真実の墓は、愛知県新城市の南富岡の洞雲寺にある。石松は、南富岡(旧名八名郡半松村)の代々庄屋の家に生まれたが、縁あつて森の侠客、森の五郎に引取られ、その後、清水次郎長一家にはいったと言う。

次郎長の代参として四国金比羅参りの帰り途、都田村(現浜松市都田町)の都鳥吉兵衛に掛合に出かけ、そこで斬り合ひになつて果てた、ということは、六沢虎造の浪曲で良く知られている。石松の遺体は洞雲寺に葬られたが、当時は博徒は嫌れていたので、後になつて「仁俠徹石信士」と戒名が授けられたと言う。

洞雲寺の石松の墓は丸い石で、刻名は無く横に石松の母の墓が並んで立っている。ここでも石松の墓は、時折けすりとられるとのことである。

森町の大洞院の墓石は現在が三代目で、右手に次郎長の碑が並んで立っている。いずれも墓碑名は削りとりられ墓碑の形はくすねられている。最初の石松の墓は、昭和十年に立てられ、次郎長の碑が立てられた昭和二十八年頃から削り取られる様になつたと言う。変形著しくなつたので、五十二年に再建したところ、盗難にあつたので、

今度は、南アフリカ産の黒御影石で三仁目を立てたと云う。墓石はどけず取り取って、一体何の為になるだろうと一般の人は思うが、これは昔から博奕打が、お守りとして大切に所持したものだ、とのことである。

この風習は川根地方にも昔からあったのである。川根地方では、墓石をけずり取ることはしなかったが、墓石の頭の角を金槌か石を使って欠き取ったのである。若い時、私はこの話を古老から聞いて、村の墓石を見て廻ったことがある。

なる程、一寸見ても気付かない程度だが、四角の頭の角が一ヶ所か二ヶ所欠けている。金持ちの墓がねらわれるものと思つたが、そりでは無く誰の墓でもよかつたらしく、大正十三年に建てた私の家の墓石も一ヶ所欠けていた。貧棒な我が家の墓石を大切に持っていたと、ろで、博奕に勝つ様なきは無いだろうと、私はおかしかった。

昭和になつても常に博奕を打つという評判の人達が、この村にもあった。村会議員で賭博好きで評判高い人があった。瀬沢に下長尾巡查駐在所が在った時代、駐在所前に宿屋があった。この宿屋の二階が博奕開帳の場所になつて、この評判があった。

駐在所の目と鼻の先で、ばくを打つなどは、警察でも思わぬだろうと、安心して賭博開帳を繰りかへていたところ、ある夜、突如警察に踏み込まれ、数人検挙されたが、二階から裏の暗やみへ飛び下りて逃げようとした仲間の中には、けがをした者があり、村会議員もけがをしたとの評判だった。

これらの常習博奕打ちは、みな墓石の破片を、後生

大事に持って居たのかと思うとおかしくなる。

博奕打ちと墓石の因縁は何となく、森の石松信仰に關係あるもの、様なき気がしてならない。現代はおそらく、川根地方には、博奕打ちが墓石を欠き取るような馬鹿けた風習はなくなったと思うが、あったとしても、現代のお墓は、高い台座の上に建てられるから、如何に石松信仰の人でも、安易に手が付けられないと思つて。

森の石松は片眼で醜男だったというが、度胸と仁侠で昭和の時代になつて、『森の石松好い男』と唄われる様になつたことは、皆さんご承知の通りです。

ふるさと夜話 第二十二話 終

盆ボゼ



道の駅

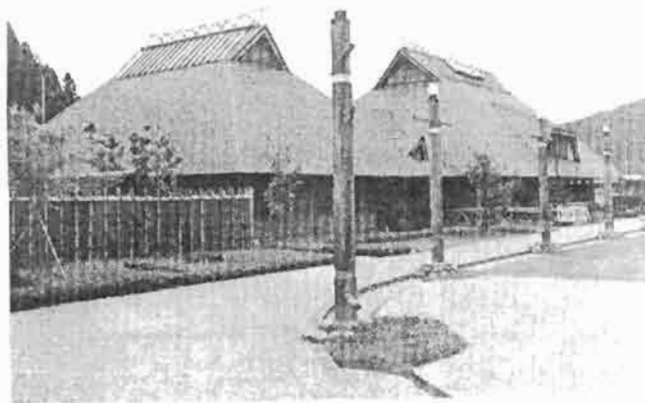
フォーレなかわね

茶茗館

Fore Nakakawane Chameikan



フォーレなかわね茶茗館が建設者が指定している『道の駅』に登録されました。入館も無料です。是非お寄り下さい。



定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 7共 150円

誠に恐縮ですが50号(次回号)より

1部 7共 200円

とさせていただきます。

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行(季刊誌)を予定しております。今回で購読料の切れる方、初めてふる里通信をご覧になれる方には、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読を、よろしくお願いいたします。

購読を止めた時や、住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

郵便払込通知票 00870-4-81556

加入者名 中川根ふる里通信係

ふる里通信に関する問い合わせ先及

発行責任者 〒428-0313

静岡県榛原郡中川根町上長尾 859-6

小沢節子

TEL 0547-56-0015

50号記念特集号原稿募集

ふる里通信も、昭和61年(1986)4月に創刊されて13年すぎました。ここまで継続させていたいただいたのも、ひとえに、読んで下さる皆様がいっぱいいることでした。ふり返って見ると、とてもはすかしい文面も多く発見され、赤面の思いがつのりますか、どうぞおゆるし下さい。

今後も今迄と同じように、ふる里の香りを風にあたよう、風船のように送って行きたいと思います。

13年の月日は、つい昨日の事の様に思いますが、やはり長い時間と言えます。その間に購読して下さった方の何十人かが来世へ旅立たれました。お父様の読んで下さったものを、息子さんが継いで読んで下さっている方もいらっしゃいます。ありがたい事だと思えます。

ふる里通信 50号、皆さんからの寄稿をお待ちしております。

題も、字数も、自由です。

(出来れば、ふる里の思い出がいいのですが)

×切は 10月末日。



南アルプスには、お花畑が多くあります。例年ですと、7月下旬は花の真盛りですが、今年は、6月下旬から7月上旬にいっせいに花が咲きはじめ、7月に見られる花はほとんど「ちっぺい、ミネマツムシソウ、トウヤフリントウ、ナシマギキョウ、トリカブト」など、夏の終りを色どる花が美しく、かれんに、咲きみだれておりました。

七月二十一日、二十三日、南アルプス登山へ行ってきました。念願の荒川、東岳、中岳、前岳、小赤石岳を登り、主峰赤石岳と、三ノロメートルの峰を五つもこえました。体力が落ちたものだと自覚しましたが、山々の神々に手を合わせ、新しい感動と、生命力をもらった気がします。これからも、気力体力をより充実させ、体力の限界に、いんどんでみたいと思います。この頃、皆さんは心臓の鼓動を感じたことがありますか？ 私は、この登山で初めて感じました。